

参加者にとって「よい話し合い」とは？

ー話し合いにおける「参加感」と「参加行為」の関係ー

中村香苗(淡江大学) 宇佐美洋(東京大学) 嶋津百代(関西大学)

1. 研究背景

本研究では、話し合いに参加した当事者のふり返りを通して、「よい話し合い」とは何かを再考する。近年、在日外国人の増加や様々な場面での市民参加の機会拡充に伴い、異なる背景を持つ人々と対話する能力がますます求められている。そこで教育現場では、話し合い能力の養成を目指した取り組みが進められている。例えば、森本・大塚(2012)らの開発した「自律型対話プログラム」では、話し合い観察者の印象評定を用いて7つの評価指標を設定し、この指標をもとに他グループの話し合いを観察し評価する「フィッシュボウル」という方法で効果的な話し合いの方法を学ぶ。このプログラムにもとづくフィッシュボウル訓練は、すでに母語話者を始め、非母語話者同士や、異文化間の話し合いにも応用され、訓練の成果も報告されている(大塚他 2011, 武井他 2009, 中村 2017, 村上 2014)。しかし、この評価方法は話し合いのプロセスなど形式的な面に注目しており、話し合いの満足度といった当事者の内面的な評価が十分に反映されているとは言い難い。そこで本研究では、話し合い参加者の経験や感覚に重きを置いて話し合いの評価を考察する。

2. データ

データは以下のプロセスで取得した。まず日本、韓国、中国からの学生を各3人ずつ集め、毎回メンバーを替えて3回話し合いを実施した。1回目は国ごとにグループになり各自の母語で、2, 3回目は各国1人ずつからなるグループで日本語による話し合いを行った。テーマは、1回目が「ペットの殺処分をいかに減らすべきか」、2回目が「SNSに年齢制限をつけるべきか」、3回目が「給食費未納問題をどう解決すべきか」である。話し合い前に各参加者にテーマに関する異なる資料を与え、20分間で結論を出すよう指示した。本研究では、3回目に同一グループになった日本、韓国、中国の学生に、自身の参加したすべての話し合いの映像を見せながら実施したインタビューを分析の対象とする。特に各学生が話し合いの体験を重ねる中でどのような価値観を形成し、それが3回目の話し合いの評価にどう影響しているのかに注目する。

3. 分析

3.1 リョウの事例

リョウ(仮名)は、当時学部4年生の日本人男性である。これまでこの種の話し合い活動には何度も参加した経験を持っており、いずれのグループにおいても司会的な役割を果たし、話し合いをまとめようとしていた。以下、リョウに対するインタビューの中から、話し合いに対するリョウの価値観がうかがえる部分を引用していく。

3.1.1 「結論を出す」という目標意識

リョウは、話し合いを始めた以上は「決められた時間内で確実に成果(=結論)を出したい」という意識を強く持っており、どの話し合いにおいても最初に口火を切ることが多かった。インタビュアーから「最初の口火を切るだけのつもりだったのか、最後まで仕切るつもりだったのか」と問われ、リョウは以下のように答えていた。

最後まで仕切るっていう、そこまでの気持ちはないですけど、んー、まあ、そこまでは考えてないです。とにかく今は、こう、まあ、まとめて、こう成果物を出すっていう目標をきっちりしたいなと思ったんで、その最初の、まあ、エンジンをかけるところは、ちゃんと自分でやりたいなって思う気持ちぐらい。

また、以下のような発言からは、時間管理についての意識も明確に確認できる。

「あ、意外と時間かかるな」と思って、こう時計を外して時計を見ながらやってたんですけど、で、これが、で、3人目（の発表）が終わったのが10分ぐらいかかったんですよ。もう半分ぐらいしかないなっていう感じで。なんかこう、その残り10分ちょっと、あの、時間ないなっていうことをまず共有したかったんで、残り、まあ、「終わり、何分ぐらいですよ」っていう確認をして。

3.1.2 臨機応変的な対応

リョウが参加した1回目の話し合いでは、それぞれのメンバーが持っている資料を各自読み、理解した内容に基づいて話し合いを行う、というやり方をとっていたが、2回目以降の話し合いにおいてはそのやり方を取らなかったという。

んー、まあ、まあ、率直な感想としては、これ、こうなんか共有する会（注：各自に与えられた資料の内容を共有するための時間）みたいなのは、これ1回目しかやってなくて、何でかっていったら、こうなんか、これを行うことによって時間がすごい、議論の時間がなくなっちゃったんで、これちょっとあかんと思ったんですけど。

1回目の話し合いでとった方法の非効率を認識するやいなや、2回目からは早速そのやり方を改めたということである。

あとなんかこう、この議論、ちゃんと着地できるんかなって。こう意外とこう、しゃべる人なんやなっていうことキャラが分かったので、こう議論ちゃんとまとめれるかなっていう不安もちょっとありました。

最初は「あまりしゃべらない人」と思っていた人が、実はよくしゃべるキャラクターであることを発見し、それにどう対応しようかと考えていたことがうかがわれる。

3.1.3 自己認識

リョウはしかし、就職活動などではこのように「まとめる役割」に回ることより、むしろ「場の潤滑油としての役割」を取ろうとすることが多く、それが自分の本来のキャラクターであると自己認識していた。

具体的に言うと（就職活動で）僕がやったのは、こう、あの、笑いを取ったりとか、リアクションめっちゃして、「ええ」みたいな、なんかそういう、なんか、ほんましょうもないんですけど、なんかそういうあほみたいな感じでこう、まあなんか1人、なんかあほみたいなやつがいたら、すごくしゃべりやすいじゃないですか。そういう、そういうなんか役割になればたかなって、まあ、やってたんですけど。

しかし今回の話し合いでは、メンバーとの関係性の中で、あえて「まとめる役割」を選び取っていたようである。

なんとなくの第一印象ってあるじゃないですか。こう、お2人（注：1回目のグループで一緒になった日本人メンバー）が、こう着席したときの、なんか感じを見て、やっぱ一番なんか、こう何というか、おしゃべりな感じっていうか、（この場で話をまとめるのは）自分なんじゃないかかなと思ったし。

常に自分のキャラクターを押し通そうとするのでなく、同じグループに入った人がどういう人であるかを見ながら、自分の取るべき立ち位置を決めていることがわかる。

3.1.4 リョウについてのまとめ

このようにリョウは、時間内で話し合いをまとめる、という目標を明確に意識し、その目標達成のため、状況を見ながら臨機応変に振る舞おうとしていたことがうかがえる。また自らのキャラクターを自覚しながらも、周囲に合わせて異なったキャラクターを取ることをいとわないなど、話し合いのまとめ役として極めて優れた態度を持っていたと言える。

3.2 ソヨンの事例

ソヨン（仮名）は、日本の大学の正規留学生で、当時学部3年生の韓国人女性である。聡明な学生で、どのグループにおいても話し合いのテーマに真摯に向き合い意見を述べようとしているのがうかがえる。以下、ソヨンへのインタビュー内容をもとに、話し合いに対するソヨンの価値観がうかがえる部分を引用しながら考察していく。

3.2.1 相反する「よい話し合い」観

ソヨンは、インタビュアーの「どんな話し合いだったらいい話し合いだと思うか」という質問に、話し合いの参加者が「意見を出しやすい雰囲気が重要だ」と即答している。この「意見を出しやすい雰囲気」が感じられなかった場合、ソヨンの話し合いに対する満足度は低かったようである。例えば、前節のリョウと同じグループでの話し合いは、それまで参加した2つの話し合いと比べると、意見を出しやすい雰囲気ではなかったことが、以下の内容からわかる。

リョウさんが最初に何か、「自分の意見、先に言います」と言って、まあ、コウさん（3.3 参照）が言って、もう何か、その一、ずっとメモをしてんですよ。（略）（リョウが）「もうこれしかないですね」って言ったから、もし、あの一、私、あんま考えなかった、考えなかったんですけど、もし他に違う意見がある人がいたとしたらもう、「これぐらいかなあ」と言ってた時点で言いにくくなるんじゃないですか。

前節で検討した「決められた時間内で確実に成果（＝結論）を出したい」というリョウの話し合いに対する意識は、ソヨンの持つ「よい話し合い」観と相反する。ソヨンは、グループの参加者のだれかが「司会者のように」振舞ってしまう

と、それ以上意見が言えなくなるという。そして結果的に、話し合いに対する消化不良的な感覚が残ってしまうことが感じ取れる。

3.2.2 「意見を出しやすい雰囲気」を阻害するもの、しないもの

それでは、ソヨンのいう「意見を出しやすい雰囲気」作りには、何がどのように作用するのか。前項で取り上げた話し合いでは、リョウが司会者のように振舞い、最初に結論案を提示したため、ソyonはその中から選択することを求められているように思い、自分の意見が自由に言えなくなった。ソyonはそのことについて「その人に質問して、何か「どうですか」言われたら、まあ、この人から言われたからこの人に答える、返すという感じにいたかな、その場に」とインタビューで答えている。さらに続けて、

自分の意見、あんまはつきりしてなかったから、ほんとに、その一、リョウさんが「何々ですか」とか、意見出したとき、自分はこうです、返す感じだったかなあ、そのときは、自分の意見じゃないから、あんま、もう質問してた人に返すっていう。

まだ自分の意見が明確になっていない時点で、他の参加者が結論を出そうとすると、その後意見を出しやすい雰囲気にはならない。ソyonにとって、他の参加者の質問に答えることは、自分の意見を述べるということにはならない。

また、ソyonは話し合いの中で「互いを見て話す」ことも、話し合いの雰囲気を作り出すものとして重視している。さらにソyonは、話し合いの中での沈黙についても言及している。沈黙は、参加者それぞれが「メモを取ったり」して「考える時間」であり、話し合いの雰囲気を阻害するものではないことを指摘している。

3.2.3 ソyonについてのまとめ：「これが話し合いかな」

このように、ソyonにとって、自由に意見が言える雰囲気が作られるかどうか「よい話し合い」の満足度に大きく関わってくる。自分の意見を多く話すことができるかという発話量の問題ではない。参加者の意見がそのまま結論に生かされていく過程を経験できるかどうか、話し合いの参加感につながっていることがうかがえる。以下のように、「よい話し合い」について、ソyonがうまくまとめている。

言いにくい雰囲気を作らずに、最初から何か結論を出す、何か絞るじゃなくて、ちょっと、まあ、オープンの状態にして、いろいろ意見を出して、そこからちょっとまとめる感じの話し合いがいいんだと思った。

参加者の意見がそれぞれ生かされて、1つの結論に集約していく過程そのものが、ソyonにとっての「よい話し合い」なのである。

3.3 コウの事例

コウ（仮名）は、日本の大学に正規留学している、当時学部二年生の中国人男性である。比較的に静かな性格だが、3回の話し合いとも所要所で発言している。では、自身の参加した話し合いについてコウはどう感じたのだろうか。

3.3.1. 「よい話し合い」の条件

すべての話し合いの映像を見直した後で、「よい話し合いとは」と聞かれ、以下のように答えている。

やはり、その、雰囲気が一番大事なと思います。みんなそれぞれも自分の意見がちゃんと述べれる、述べられるし、自分のありのままの考えを、正直に、言うのが一番大事だなと思います。みんなお互いの話す上で自分の考えを、広げる話し合いが一番いいだなと思います。

コウにとって「よい話し合い」の鍵は、「意見を言える雰囲気」と「自身の考えの広がり」の2点であることが確認できる。次に、このような価値観を持つに到ったコウの思考をさらに掘り下げる。

3.3.2 トピックの重要性

インタビューの中で、何度かトピックに言及する場面がある。例えば、話し合い全体の感想を以下のように語っている。

まあ同じ国の同士に、と話す時は、まあ、行動しやすいんですけども、でもやっぱり、あの、その、進むは、流れとか課題とか、トピックによって、その話す内容は、その進めるのが、やはりトピック、が最も大事で、あの言語とは、そんなに重要じゃないと思います。

また「(1回目と2回目)どちらが話しやすかったか」という質問にも、以下のように答えている。

2 番目。(どうしてか?) ペットのことはあまり関心していないですので、でも携帯の制限とかは前も知っていましたから(話題に馴染みがあった)。

さらに、3回の中で一番うまく行った話し合いとして、以下の理由で3回目を挙げている。

自分はあまり意見は話してなかった。でも雰囲気で言えばやはり3 番目。(雰囲気とは?)みんな自分それぞれの意見を言いました。んー、トピックも自分は関心があるトピックなので、最後はみんなも笑いながら、自分の体験とか言いました。

これらを統合すると、参加者みんなが「意見を言える雰囲気」が大切で、それにはトピックが深く関係していることがわかる。しかしコウ自身が意見を言えたかどうかは、話し合いの評価に直接影響を与えていない。この点に関しては、コウの自己認識にも関わっているようだ。

3.3.3 自己認識

コウは自分から話し合いをリードするタイプではない。以下は1回目と3回目に対し、「自分がリーダー（司会）になると思ったか」と問われた時の答えである。

（1回目）いや、全然、，，自分はその務めがあるとか全然思わなかった。

（3回目）（リーダーをやるつもりは）ない。自分は誰もやらなければ自分がやる。もしやる人がいれば私は大人しくしている。

また、2回目では他の2人に比べてあまり発言していないと指摘されると、以下のように述べる。

たぶん（他の参加者の）性格によるかな。M（韓国人）はまあもともと、あの、明るい性格なので。

（長い沈黙について）たぶん自分の性格かな。私の性格はみんなが話す時は自分聞く。でもみんなが話さなければ自分話す。でもみんなはどんどん話しているから、黙って聞いたらいいかな、と思って。で、みんなが話したいことが終わってしまって（コウの意見を）聞く状態（待つ状態＝沈黙）になってしまった。

コウは、他の参加者がよく話す場合は聞き役になる傾向がある。2回目の韓国人学生や3回目のリョウがたくさん話したことに對しても、概して好意的に語っている。

3.3.4 考えの広がり

コウにとっては、自身が意見を言えたかどうかよりも、自分の考えが広がったかの方が重要なようだ。例えば、3回目の話し合いを1番評価しているものの、冒頭で資料の共有をしないという進め方に関しては以下のようにも述べている。

私にとってはたぶん最初は資料共有した方がいいと思います。なぜなら、もし、先に意見を言うのは、（中略）やはり自分の手元の資料だけが自分の言う意見を、その根拠を支える、支持する、あの意見をだけ出してしまったので、もし資料が共有すれば、みんなの意見、視野はもっと広がって、その考え方も広がって、と思います

3.3.5 コウについてのまとめ

コウにとって、トピックに関心が持てて、参加者が自由に意見を言える雰囲気があり、必ずしも自分が意見を述べなくても話し合いを通して自分の考えが広げられるのが「よい話し合い」であり、これらの点で3回目をもっとも満足度が高かったようだ。

4. まとめと今後の課題

本稿では、メンバーを変えた複数回の話し合いに参加した学生たちへのふり振り返りインタビューをもとに、話し合い参加者の「よい話し合い」に対する価値観を探った。その結果、話し合いへ「参加すること」が話し合いの「満足度」に深く関わることが明らかになった。しかし、話し合いへの「参加」が何を意味するかは、人によって異なることも浮き彫りになった。この結果を踏まえると、話し合いの訓練において、いかに参加者の参加感や満足度などの内面的側面も考慮に入れた指導や評価をするべきか、今後さらに検討を重ねる必要がある。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 16K02831 の助成を受けたものである。

参考文献

- 森本郁代・大塚裕子（編）（2012）自立型対話プログラムの開発と実践 ナカニシヤ出版
- 村上智子（2014）学習者がどのように議論スキルを向上させたかー「自律型対話」ディスカッション・トレーニング実践報告 日本語教育方法研究会誌, 21 (1), 104-105.
- 中村香苗（2017）対話力を育む異文化間議論授業の実践研究ーフィッシュボウル訓練の質的分析ー 瑞蘭国際
- 大塚裕子・岩倉成志・竹内和宏・富田英司・森本郁代（2011）工学系学生のための対話力育成授業ー「自律型対話プログラム」の開発と実践 工学教育, 59 (5), 43-49.
- 武井紀子・大塚裕子・岩倉成志（2009）土木技術者の自律的対話能力向上を目指した大学教育プログラム 土木学会論文集H(教育), 1, 111-121.